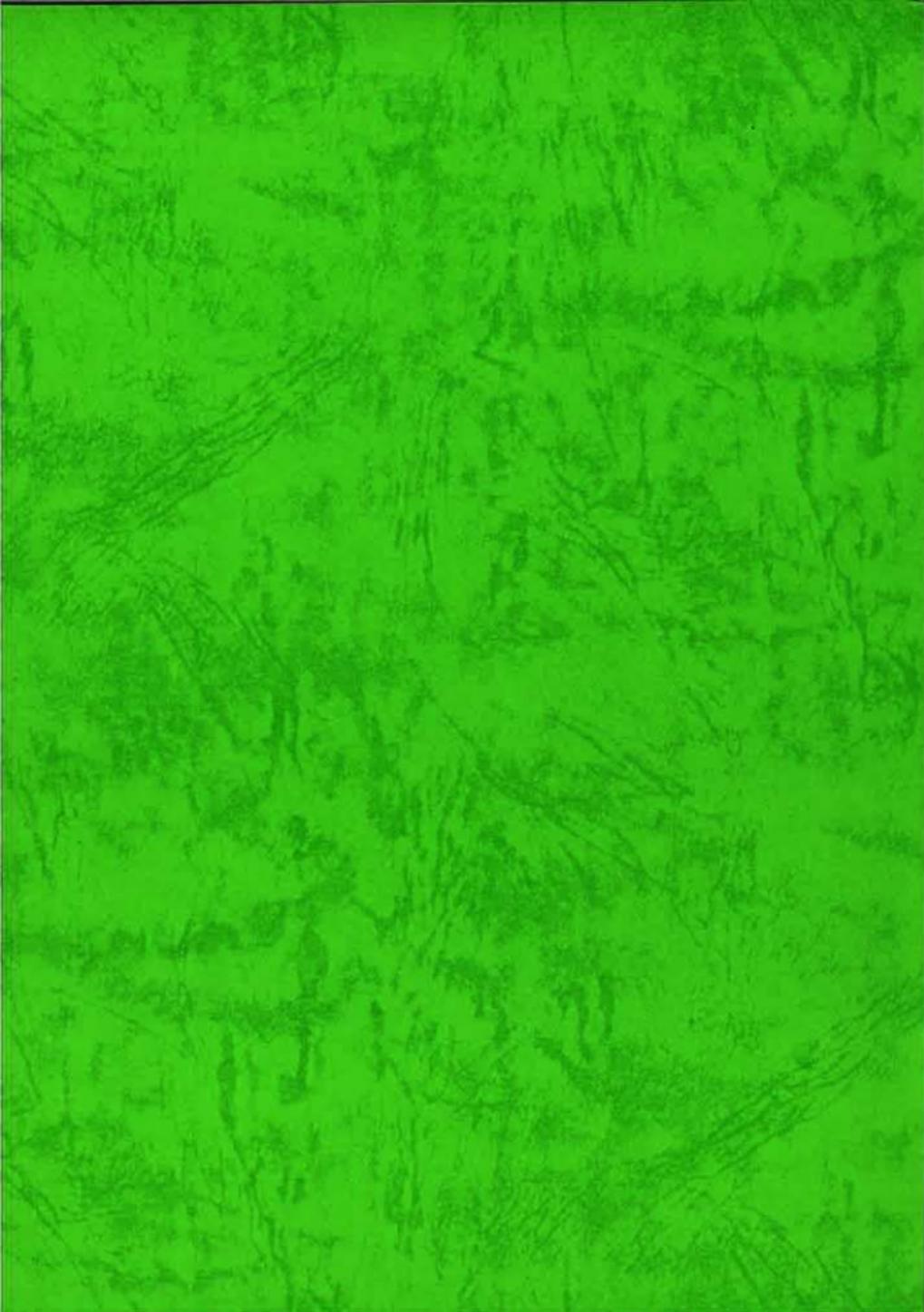


# 宅地造成に伴う中田遺跡調査概報

昭和59年1月

有明町教育委員会



## 序

南高来郡有明町大三東中田遺跡は、昭和32年諫早大水害を端緒として発見されたが、纏文後・晚期遺跡である。建物の建築上その端辺とみられる部分調書はあったが、今だ正規の調査はなされていない。

このたび尾崎富男氏により、分譲宅地造成がなされるのを契機として、同氏と検討の結果、周辺の遺跡を調査し、保存を計るべく今回の本調査となった次第です。

今回の調査は、尾崎富男氏のご理解と積極的なご協力により、本調査が実施されることになったものであります。

この調査にあたっては、古田正隆先生をはじめ諸先生方には、8月の酷暑の中で20日間に亘って現場での作業並びに指導を賜わり、その仕事が完成し、報告書が出来上がったことは、本町の将来にも誠に喜ばしいことであります。又、町内に散在する遺跡は今後大切に保存し、住民の理解と協力をえて、過去の歴史を識り、将来へのよりよい展望を考えなければならないと存じます。

この度の発掘調査にあたられた諸先生方のご労苦とご熱意に対し、深く感謝申し上げると共にこの報告書が埋蔵文化財の記録保存と活用がなされ、貢献ができることを期待いたします。

昭和58年10月

有明町教育長 菊池 程義

## 目 次

序.....	1
はじめに.....	4
1. 調査に至る経緯.....	5
2. 調査地（第1図・第2図）.....	6
3. 調査地の遺跡環境（第1図）.....	6
4. 各トレンチの地層（第3図、第4図、図版第1図～第4図）.....	6
5. 遺物.....	8
土器（図版第6図～第9図）	
石器（図版第10図～第13図）	
6. 総括.....	10

### 挿図目次

第1図 有明町内における遺跡分布図.....	5
第2図 中田遺跡トレンチ設定図.....	6
第3図 A, B トレンチ設定実測図.....	7
第4図 C トレンチ設定実測図.....	7
第5図 A トレンチにおける小兒合口甕棺埋葬実測図.....	8
第6図 特殊遺物実測図.....	8

### 図版目次

第1図 A トレンチ北側断面実測図.....	11
第2図 B トレンチ断面実測図（西側）.....	12
第3図 C トレンチ-1 東側断面実測図.....	13
第4図 C トレンチ各断面（東側）実測図.....	14
第5図 A トレンチ甕棺埋葬上器実測図.....	15
第6図 土器実測図.....	16
第7図 土器実測図.....	17
第8図 土器実測図.....	18
第9図 土器実測図.....	19
第10図 石器実測図.....	20
第11図 石器実測図.....	21
第12図 石器実測図.....	22
第13図 石器実測図.....	23
第14図 A 地区と A トレンチ写真.....	23
第15図 A トレンチ写真.....	24

第16図	Bトレンチ遺物出土状況写真	24
第17図	C地点とCトレンチ写真	25
第18図	各トレンチと遺物出土写真	25
第19図	各トレンチの遺物出土状況写真	26
第20図	各地層と遺物の出土状況写真	26
第21図	石器写真図	27
第22図	石器、鉄滓、土鈴写真と、309号甕棺出土写真	27
第23図	土器写真図 (No 3は309号関係, No 4は須恵器関係, No 1, 2は縄文土器)	28
第24図	土器、鉄滓関係写真図 (No 1は須恵器、土師器関係, No 2は鉄滓と土鍤, No 3は縄文土器)	28

## はじめに

昭和58年6月初め、中田遺跡地の一部において、宅地造成の進行中であることを知り、同月10日有明町教育委員会に電話連絡、同月14日遺跡地の宅地造成者（同町湯江丁464番地尾崎富男氏）に連絡、工事の中止と調査を要望す。（6月18日には有明町土木課、同教育委員会に再度状況調査を依頼）。

6月20日有明町教育委員会において、関係各位と造成者を混えて協議、事前調査の了承を確認しあい、現地を再観察、調査準備を開始す。

6月21日現地で遺物採集を実施。翌22日有明町教育委員会において調査書類の作製に入り、中田遺跡調査団を下記の如く編成組織す。

調査団長 菊池 程義（教育長）

調査副団長 石原 定義（教育次長）

調査団員 講見 富士郎（日本考古学協会々員）

調査団員 宮川 武利（教育主事）

調査団員 吉田 安弘（島原市文化財審議委員）

調査担当者 古田 正隆（日本考古学协会会员）

調査助手 小畠 弘己（熊本大学研究员・現福岡市教育委員会）

調査地 中田遺跡の一部である、有明町大三東下土戊1022番地2（有明町湯江丁464番地、尾崎富男所有地）。

発掘予定面積 300平方メートル

発掘予定期日 昭和58年7月26日～8月14日

以上の計画予定に基き発掘調査を実施したのである。

この間初期の段階では松尾フサエ、坂本スミエ、鯨津善保の各氏に、長期の調査段階の期間では松本シゲノ、佐々木スズ子、疋田ノブ代の3氏が、連日の酷暑の中を撫労を担当され、大変御苦労を御願いした。その他現地地主を初め、多くの御協力を得た方々に対して、衷心より感謝し、敬意を表したい。

昭和59年1月

古田 正隆

「御詫び」 原稿削除があったため、註解番号が一部前後しており、御詫びして御判読を御願いしたい。

# 宅地造成に伴う中田遺跡調査概報

## 1. 調査に至る経緯

現地は昭和32年疋早大水害直後、島原高等学校郷土部員によって発見され、島原高等学校において調査を実施報告され、古くから知られた遺跡地であった。

「はじめに」でも記したように、6月初旬より、中田遺跡地の一部が宅地造成されつつあるを知り、前記の如く調査へと計画されたのであるが、この地はその眞実性は別として、湯江村役場刊「ゆえむら」(昭和27年9月5日)、大三東村役場刊「おおみささ」(昭和27年6月20日)等にもみえていように、発掘調査によつても伝承の如く、この地が中田街(まち)と呼ばれてきた名にふさわしい。古墳期末より奈良、平安期という長い期間、或る地方豪族の居住地域を形成していたことは間違ひなく、各地層断面図(図版第1～第5図)でも解るように、基本的には中田遺跡は、この地特有の地層にみる2本の黒色バンド(雲仙火山灰層)のうち、上部黒帯層と中をはさんで形成をみる、縄文文化後期末御領式を主体とする遺跡であるが、「中田遺跡図録」でも示したように、或る地点(旧状を残した地点)ではこの文化層は1層であり、既にこの生活層はその後数回に亘り破壊され、Aトレン

チ2層もかつて、平安期頃の生活面であったよう、この層中には微細な土器、瓦類が荒砂状となって混入し、その後においても蜜柑植付に際しての坪掘り、或いは今回のブルトーザーによる地均し、水道管の布設工事等々、遺物の層中存在も全く混乱状態を極め、地表において採集される遺物も新旧入り混り、



第1図 有明町内における遺跡分布図

- |                          |                            |                          |
|--------------------------|----------------------------|--------------------------|
| 1. 中田遺跡 <sup>註1</sup>    | 2. 妙法塚古墳 <sup>註2</sup>     | 3. 小原下遺跡 <sup>註3</sup>   |
| 4. 一野遺跡 <sup>註4</sup>    | 5. 向原遺跡 <sup>註5</sup>      | 6. 森岡遺跡 <sup>註6</sup>    |
| 7. 久原遺跡 <sup>註7</sup>    | 8. 塙ノ松遺跡 <sup>註8</sup>     | 9. 山ノ内遺跡 <sup>註9</sup>   |
| 10. 松尾遺跡 <sup>註10</sup>  | 11. 山ノ上横穴古墳 <sup>註11</sup> | 12. 平山古墳 <sup>註12</sup>  |
| 13. ニッカ遺跡 <sup>註13</sup> | 14. 川原遺跡 <sup>註14</sup>    | 15. 大野原遺跡 <sup>註15</sup> |

近世においては埋蔵文化財行政の劣悪さ、業者の企業意識しか認められない。全く人類生存の為の資料を重視する考え、考慮の、かけらもないことを露呈したものであった。従つて本報告も、結果的には破壊報告でしかあり得ないことを悲しむものである。

## 2. 調査地（第1図、第2図）

調査地は第1図に示した1地域であり、この地のトレンチ設定は第2図に示すとおりである。

今回の調査地は、以前に調査した中田遺跡の下部（海に近接して）約100メートル位の地点に当たり、県の行った遺跡の分布調査で、中田遺跡の範囲としてみなしてきた、地形的

範囲で、標高約17メートル内外の台地端に位置する（昭和49年8月県調査）。

## 3. 調査地の遺跡環境（第1図）

今回の調査で鉄滓が4～5個出土した、地層の断面でも（図版第3図1T-5, 1T-7の3層が含鉄層「酸化鉄」）含鉄層が存在し、この地の下部海岸に菅（すが）地名があり、菅は製鉄地に多いことは地名表でも紹介されているとおりである。

土地の郷土史家は、菅原道真と結びつけたものと、信はおけないとしながらも述べている。（別記「おおみさき」、「ゆえむら」）むしろ積極的に製鉄と関係づけ、今後の研究を望みたいものである。

有明町を流れる小流は、震山火山灰土に含まれた砂鉄の含有が多く、これらは将来の問題であろう、中田街の伝承も発掘結果からみて、地域豪族の存在は知れても、その性格は知ることは出来ない。

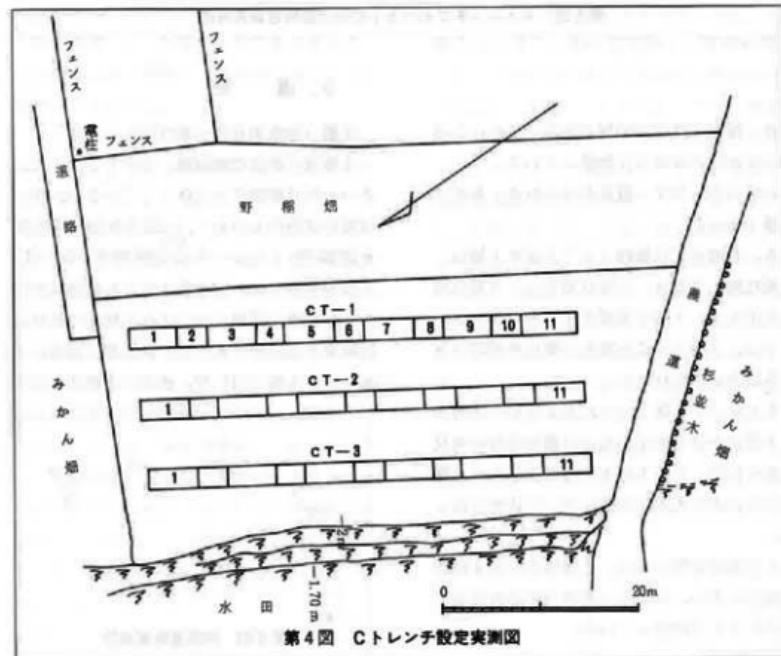
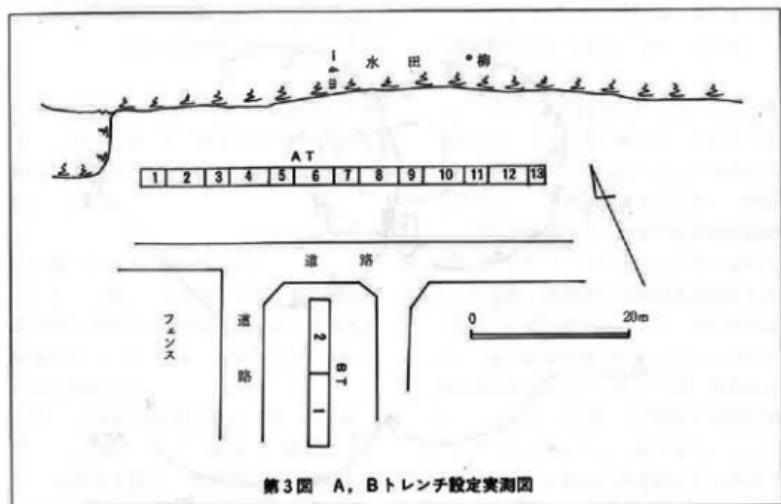
## 4. 各トレンチの地層

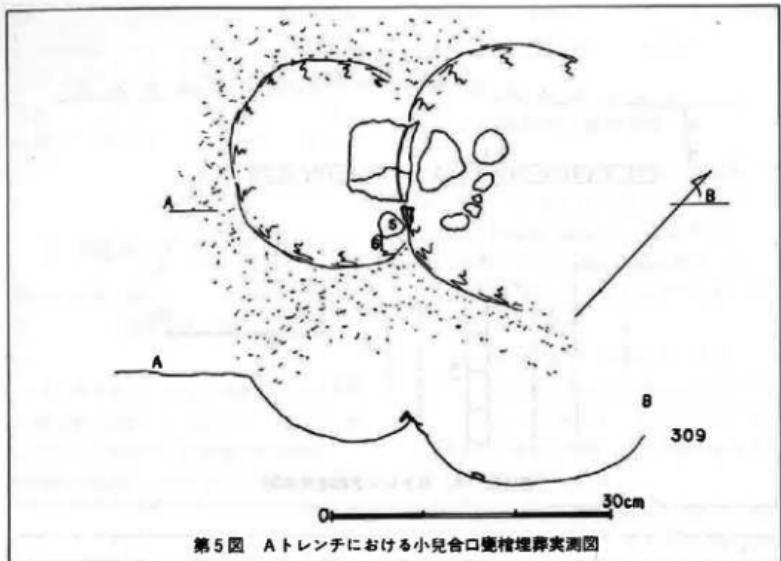
（第3図、第4図、  
図版第1図～第4図）

A, Bトレンチは第2図に示す区域であり、C地区トレンチは第2図に示すCトレンチ地区である。

各トレンチについて特筆すべき点は、地層が一様に擾乱された状態であり、旧地形はもっと標高の高い台地であったものを、或る時代に上面を削平し、縄文時代の遺跡生活面の破壊は早く、下部も削平と盛り土がくりかえ







第5図 Aトレンチにおける小兒合口壺棺埋葬実測図

## 5. 遺 物

され、擾乱の様相が地層に刻みこまれ、この地の生活史の複雑さを物語っている。

C地点でも削平と擾乱がみられA、B地点同様であった。

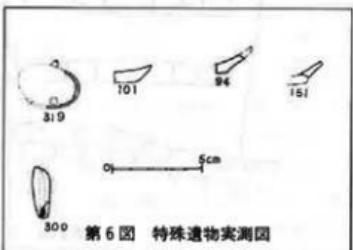
A、B地点では概様として上より1層は、黒褐色耕土であり、2層は褐色土、3層は黒色火山灰土、4層は黄褐色土であるが、C地点では、3層として赤褐色の酸化鉄層のはさまる部分がみられた。

Aトレンチ8区でみられるように、2層から3層にかけて弥生小兒合口壺棺埋葬の発見があったが、その上部大半はカットされ、埋葬穴に若干の土器片が残っていた状態であった。

この地区も明らかに、2層以上がある時代の削平にあい、2層の一部は当時の生活面であったことを物語っている。

### 土器（図版第6図～第9図）

土器は「中田遺跡図録」で示したように、古いものは御領式を主体としているが、中に西平式系のものも二、三混合をみ、（図版第8図260等）また山ノ寺式（図版第8、26-1）土器等もみられ、従来考えていた御領式を中心とした单一遺跡とはいえない様相であり、図版第9図に示すように、須恵器、瓦器、土師系祭祀土器（94）や、鉄滓、土鍤まで出土



第6図 特殊遺物実測図

し、(第6図)良好な近接遺跡の今後の調査研究によって、その性格が把握されなければならないだろう。

図版第6図19, 22, 17等は黒色研磨土器であり、同図の20, 31, 28等は赤色味を帯びた焼成色の条痕土器で、粗製土器の部類であろう。

#### 石器 (図版第10図～第13図)

石器は一般的に大形のものも混り、(図版第10図204, 図版第11図203等)これらは須恵器、瓦器時代か、或いはもっと文化年代の降るものかも知れない。

然し図版第10図205, 165, 47, 図版第11図21, 図版第12図213, 80等は、農耕石器としての特徴を備え、今破壊され、擾乱された遺跡の中で、そのセット関係を述べることは出来ないが、注目されるべきであろう。

中田遺跡としては後半にあたるであろう、平安期頃以降の遺物で、第6図に示すような遺物の出土がある。

第6図の319は土師質の土鈴の破片とみられ、このような例は県内で、深堀遺跡で一例知られている。<sup>319</sup>

その他第6図の101, 94, 151, 300等は略々これと平行文化期のものであり、中田街形成伝承を、製鉄と関係づけて地域豪族の存在を裏付けるものの一つであろう。

中田遺跡出土須恵器は、(図版第9図)焼成色が他の須恵器類より若干灰色が強く、いわゆる韓國渡来の、陶質土器でないかとみられるものもあるが、須恵器特有の内面に唐草文の、蔓状凹目文が全部にあるようでもあるが、一部は余りにも細片であるため不明のものもある。(いずれにしても特徴的焼成色である)出土品も全体的に細く、形状を知れるようなものはない。<sup>320</sup>

鈴について若干付け加えれば、中空土偶に「ガン」(丸、土か、石の小玉)を入れ、振る

と音を出すようなものは、南関東の縄文晩期に数例知られ、又東北の足川(八戸市)でも知られている。

弥生文化の中では余り例はないが、古墳文化期には、主として装飾品として出土(金属品)を見るが、この間鈴の文化の中止があった訳でなく、下関市綾羅木郷台地(下関郷土の文化財を守る会刊「綾羅木郷発掘調査報告書(1)」昭和58-1-10), 松江市西川津町タチヨー遺跡、静岡県伊場遺跡等の各弥生遺跡で陶瓶(土笛)を出土、これらは中国の古い時代から影響を受けたもので、(中国の古い発見例は商代のものがある)同一意義をもつものとみられ、(沖縄、水戸市等では縄文後期に石笛の出土例もある)音を発するという共通点があり、日本の古神道時代より神前で鈴を振り、音声を出して祈求したことは今日でも同じであるが、形態上女性形とされ、その起りは印度で、眠れる男神を、女神が振鈴によって眠りから覚させる道具に使われたといわれ、これらのことがらからみて、鈴は祭りの場で、神に対する人々の、何等かの祈求に使われたことは間違いないことである。

中田遺跡地の旧地形は、もっと盛りあがった小山状であったことは、縄文後期末を主体とする包丘層が、極小ながら小面積が何等かの理由で残置され、その一層がその文化層であった事実に証明できるものの、その後の削平、平坦化はそれまた地域の理由のあった事実で、この丘の上で詔神、地鎮、豊作、豊漁その他の希求祭事の行われたことも確実で、特に平行文化期の土鍾の出土を考えると、豊漁の希求か、航海安全、或いは製鉄に関する祭事であったかも知れない。(第6図101, 94, 151)

いずれにしても出土鈴は、この地に権力体、支配体が確立していたことを示すものである。

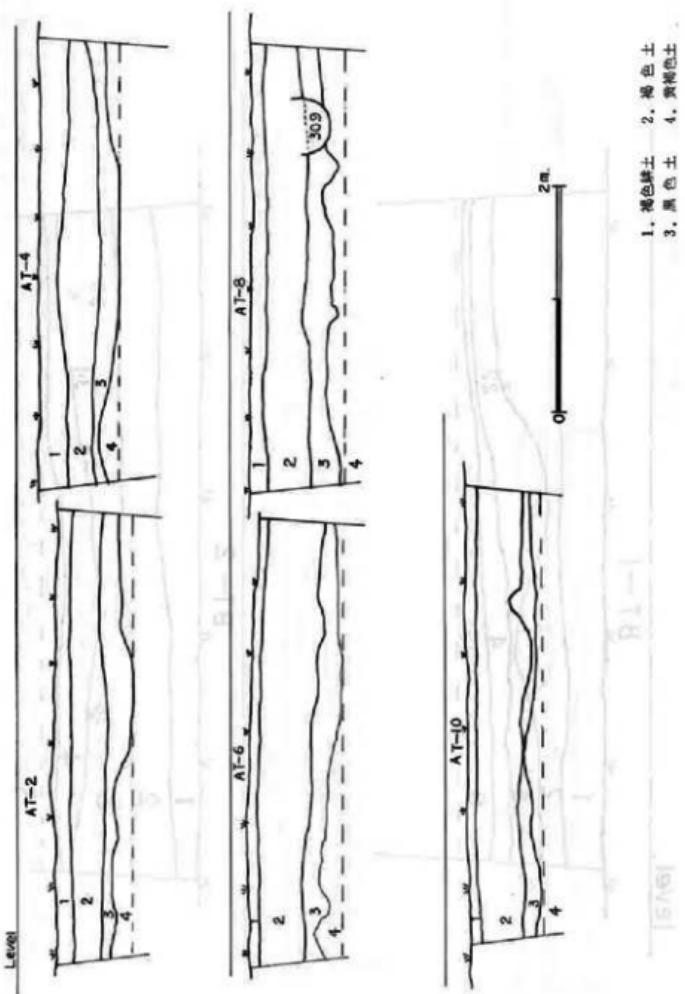
## 6. 総 括

本報告は概報であるが、遺跡の調査報告というより、遺跡破壊の史的検証といった方が適切であるかも知れない。

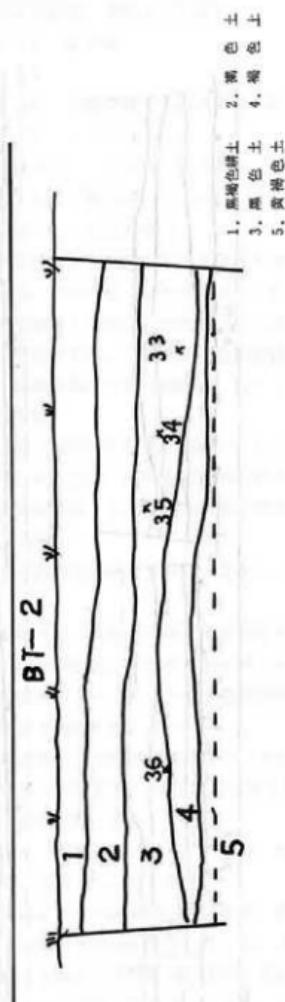
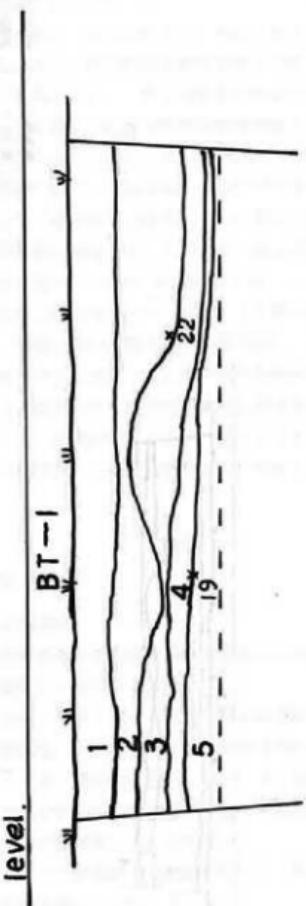
一野遺跡は、昭和41年3月、長崎県教育委員会、島原市、有明町の各教育委員会共催で調査が実施された。一野では貴重な板状石横積の石室が発見され、当時残存する保存することが取りきめられた。然し今は跡形もない。その後湯江駅近くの妙法塚で、昭和43年頃水産会社の工場建設地造成中、5~6基の古墳期埋葬施設が発見され、その内の1基は比較的良好な保存だったため、残置することになったがこれもはない。<sup>[12]</sup>このような例は数多く、森岡出土の遺物は学校改築に際し、行方不明となり、小原下は工場のため敷地がセメントで固められ、旧中田調査地は幼木育成地として、昭和50年頃ブルトーザーによる天地返しが行われ、遺物は畠すみに打ち捨てられている。

## 註 解

1. 本報遺跡
2. 長崎県教育委員会「長崎県埋蔵文化財調査集報(2)」1979-3
3. 古田「小原下遺跡の報告」国見高等学校社研部報、1968-5、古田「製鉄遺構を伴なう小原下遺跡調査報告」、1979-6、島原工業高等学校郷土部「小原下遺跡の問題点」昭和44年度部報2号、1970-12
4. 古田「一野遺跡(南高来郡有明町)」有明町教育委員会、1964-8
5. 古田「島原半島の縄文晩期から弥生文化への移行」福岡考古懇話会々報10、1979-6、古田「長崎県の縄文時代のカメ館」考古学論叢2、1974-5
6. 長崎県教育委員会刊「長崎県遺跡地名表」
- 長崎県文化財調査報告第1集、昭和37年8月、中学校旧茶園、遺物は中学校保
7. 前出6、散布地
8. 前出6
9. 前出6、宮崎貴夫「山の内遺跡資料(石器)図集」S. 48-10
10. 萩尾俊介「アワビ貝を伴う埋葬習俗について」考古学研究27-1、1982
11. 前出6、中尾氏宅地内
12. 前出6、上後久原、本田元作氏宅地内
13. 古田、吉田安弘「小十字の刻字を持つ楕音形刻印石」速報10、1981-6、塙田元久、古田「島原半島における縄文晩期墳墓の姿」島原高等学校報、昭和32-12-1
14. 敷地
15. 古田「巨石蓋土塚墓の新例」しまばら、1969-11、古田「有明町大野原の研究—長崎県有明町境ノ松—」国見高等学校社研部報、1969-5
16. 島原鉄道布設時に多くの遺物を出土している。
17. 塙田元久、古田「南高来郡有明町大三東中田遺跡の報告」島原高等学校郷土部報、昭和33-7-1、古田「中田遺跡図録」百人委員会報第8集、1977-8
18. 森貞次郎「長崎県南高来郡山ノ寺遺跡」日本考古学年報11、古田「山ノ寺梶木遺跡」百人委員会報、1973-8
19. 古田「農耕石器についての考察」長崎談叢49、1970-5、その他
20. 長崎大学医学部解剖第2教室刊「深堀遺跡」人類学考古学研究報告第1号、1967、現物は長崎大学医学部第2解剖学教室保
21. 初め古田調査、後半県に引きついだ
22. 帝塚山考古学研究所「日、韓古代文化の流れ」1982参考
23. 下関郷土の文化財を守る会「綾羅木郷発掘調査報告書(1)」昭和58年1月10日
24. 前出17

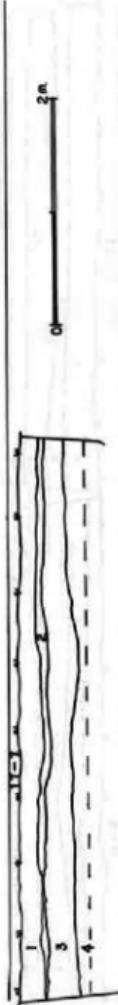
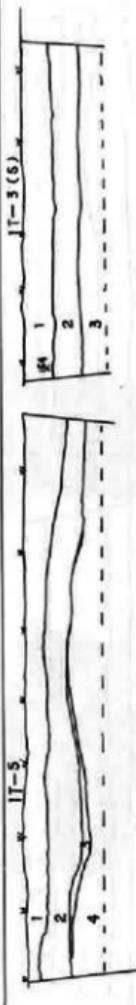
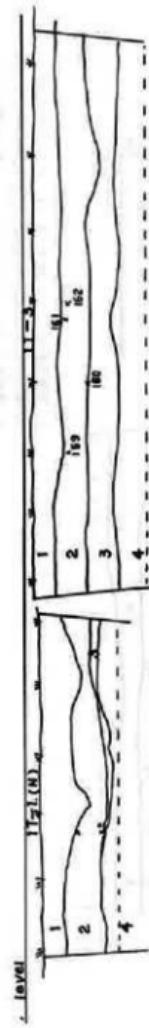


図版第1図 Aトレンチ北側断面実測図



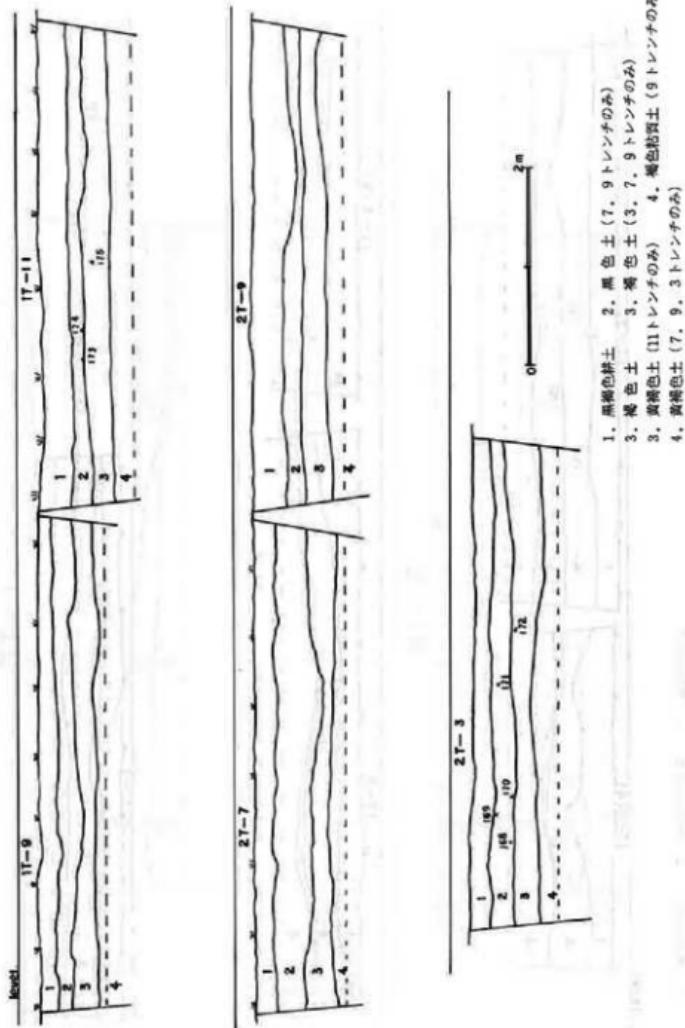
図版第2図 Bトレンチ断面実測図（西側）

1. 黒褐色鮮土 2. 黒色火山灰土 3. 棕色粘質土

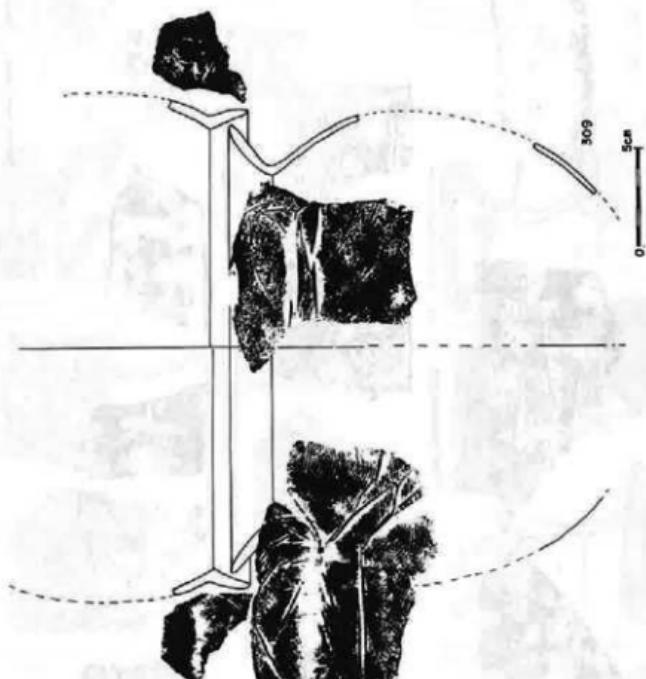


1. 棕色鮮土 2. 棕色土 3. 赤褐色土 (5, 7 トレンチのみ)  
4. 棕色土 5. 棕色粘質土 6. 黑褐色土 (5 トレンチのみ)

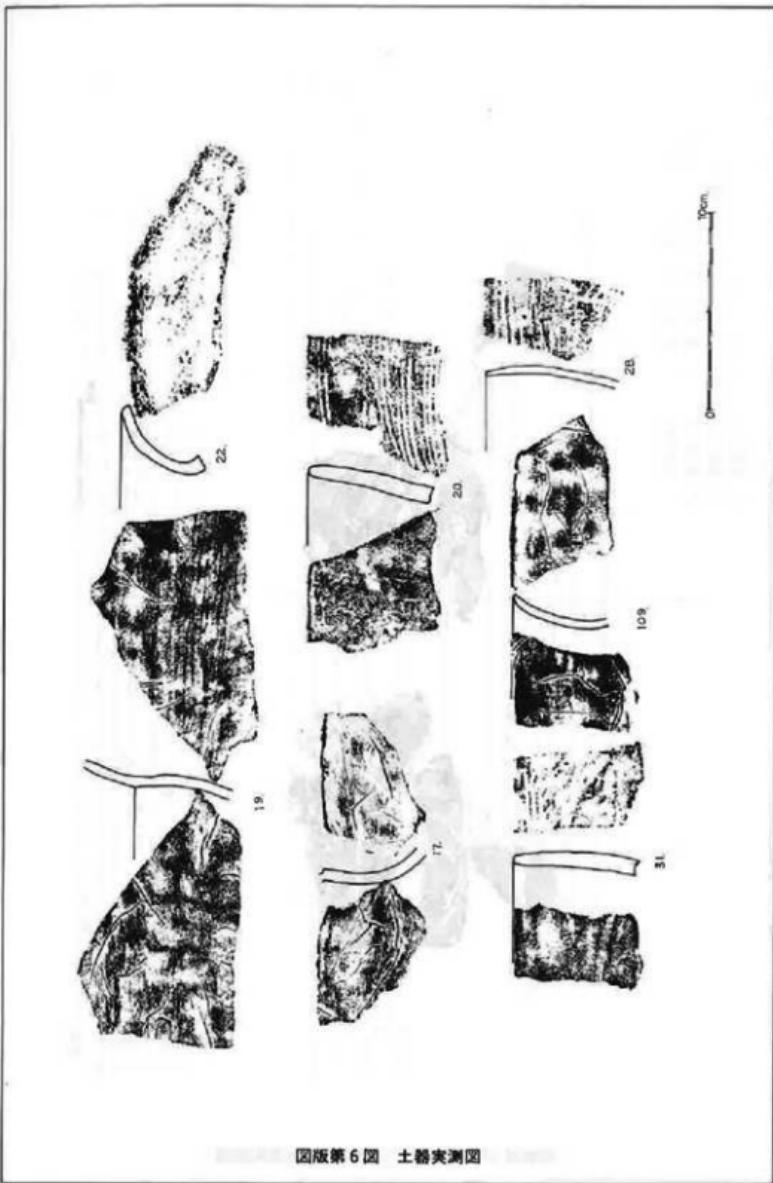
図版第3図 Cトレッサー1. 東側断面実測図



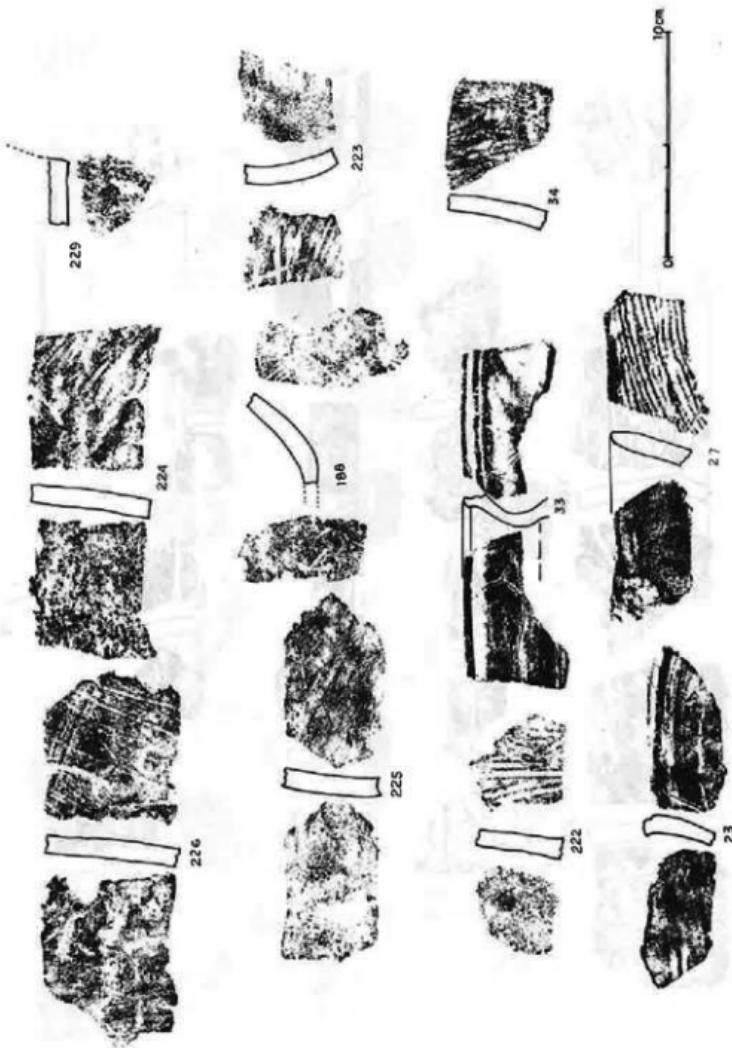
図版第4図 Cトレンチ各断面(東側)実測図



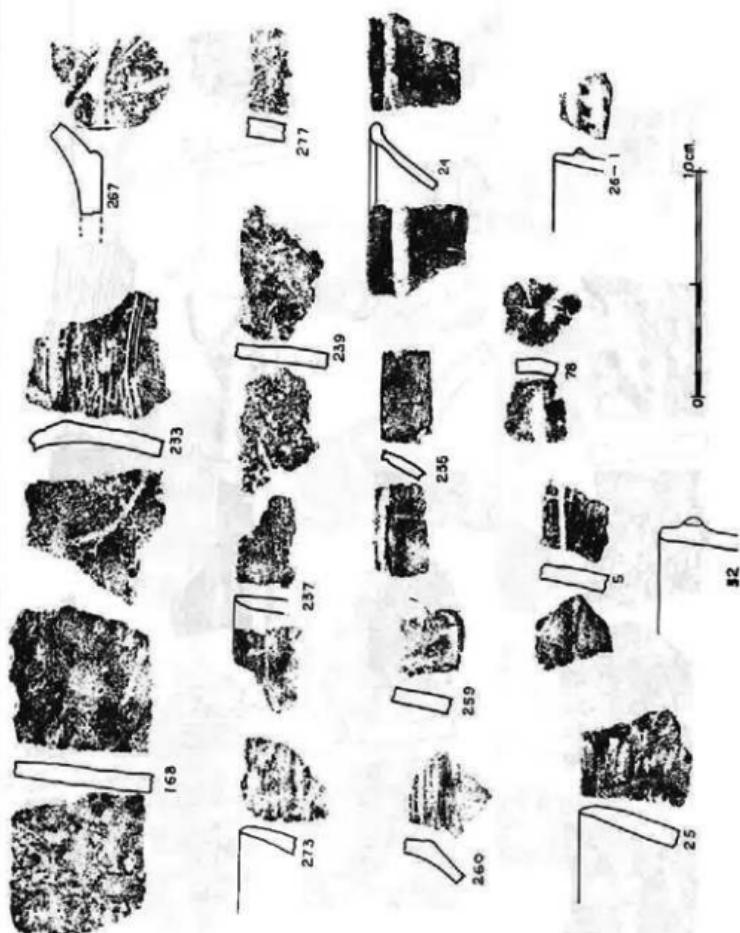
図版第5図 Aトレンチ発掘埋葬土器実測図



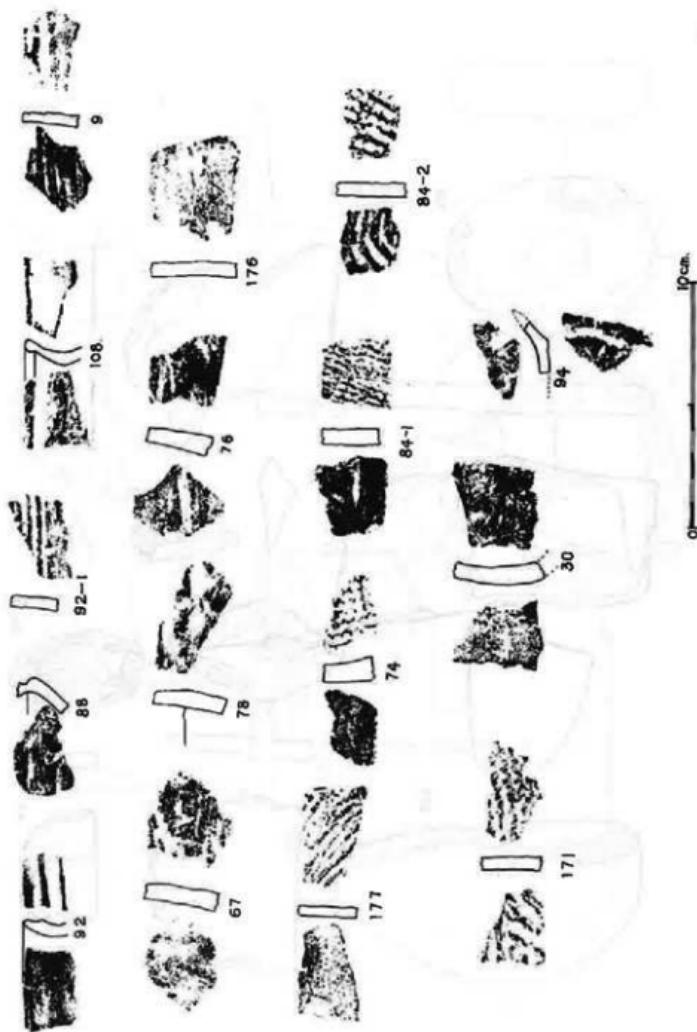
図版第6図 土器実測図



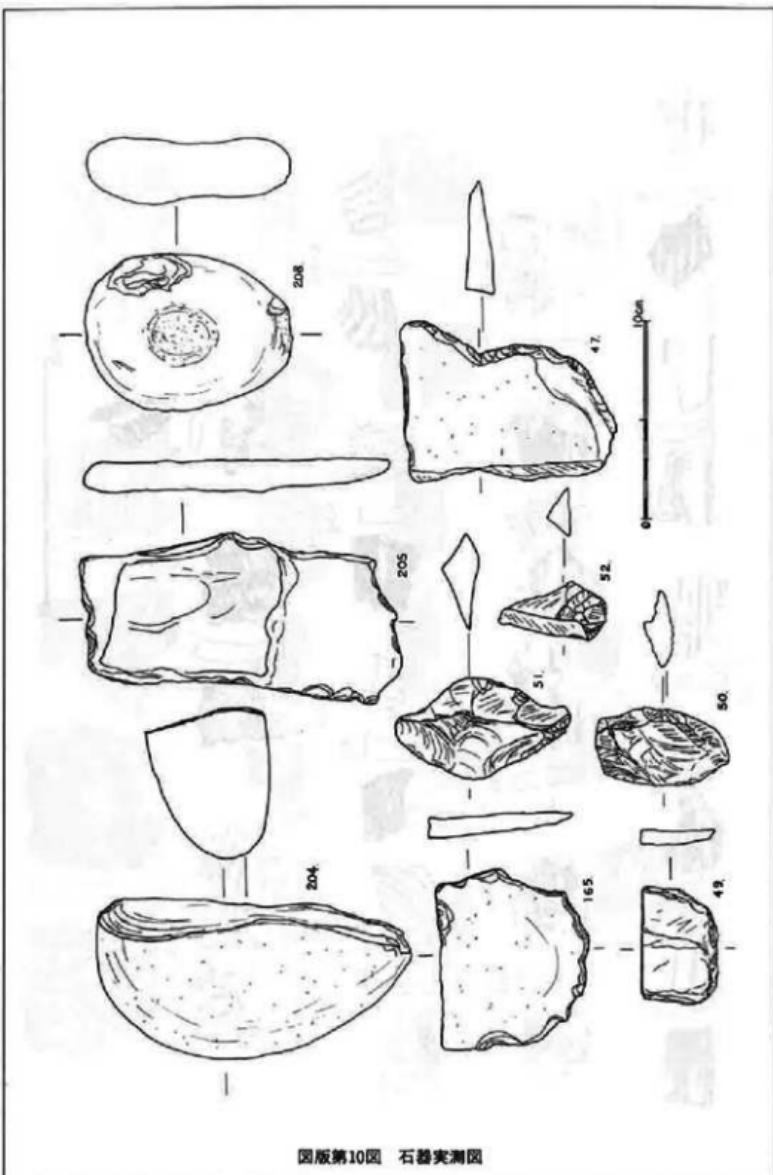
図版第7図 土器実測図



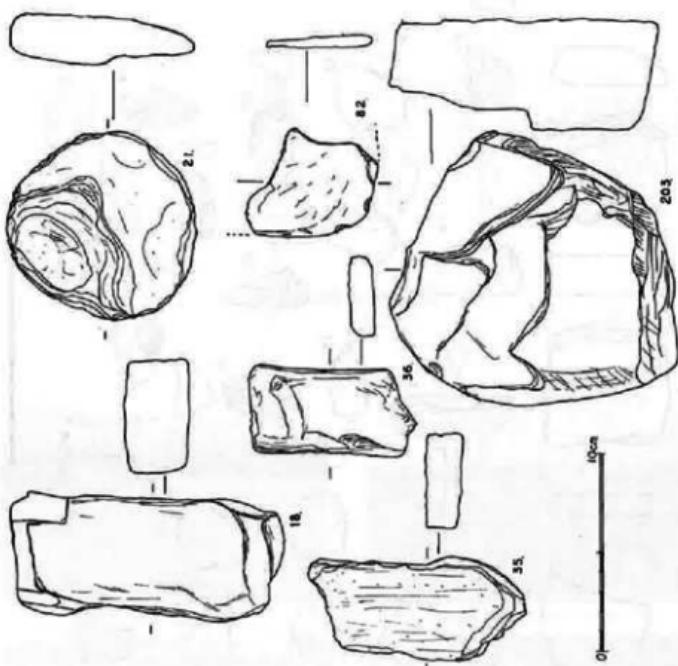
图版第8图 土器实测图



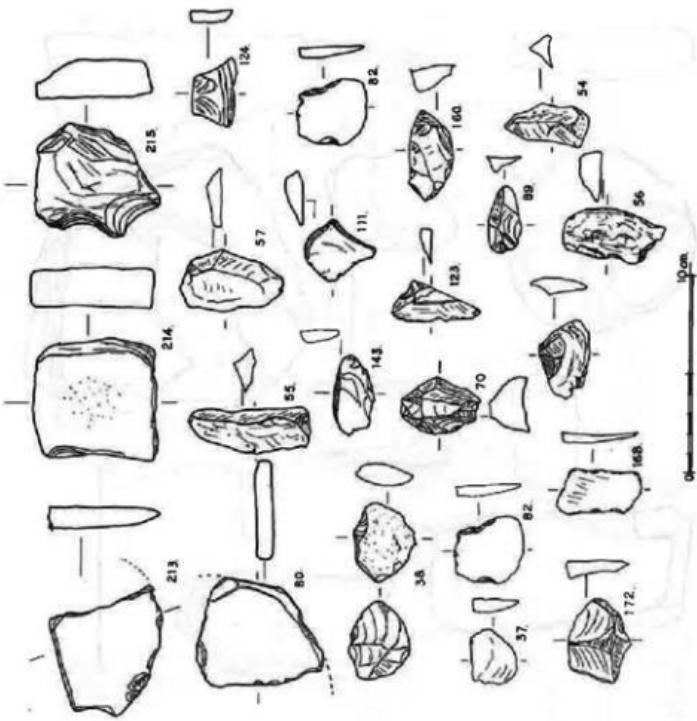
図版第9図 土器実測図



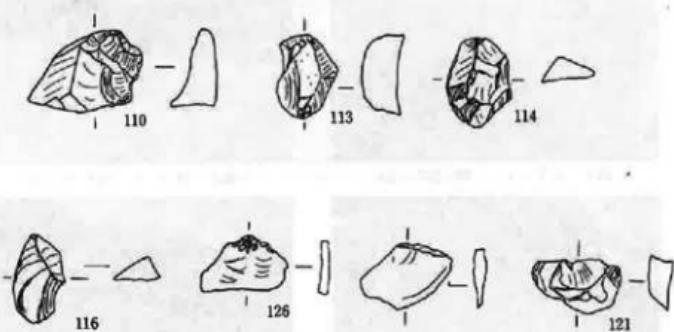
図版第10図 石器実測図



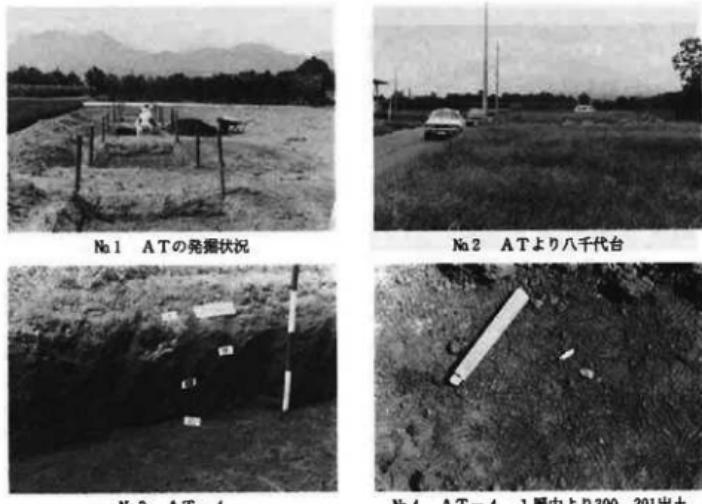
圖版第11圖 石器測量圖



図版第12図 石器実測図



図版第13図 石器実測図



写真第14図 A地区とAトレンチ



No.1 AT-4 1層中297~299



No.2 AT-7 北セクション

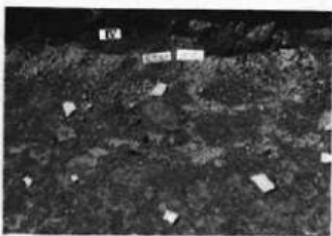


No.3 AT-11 トレンチ内



No.4 AT-11 遺物出土状況

写真第15図 Aトレンチ



No.1 Bトレンチ2 遺物出土状況



No.2 BT-2 断面

写真第16図 Bトレンチ遺物出土状況



No. 1 C地点の景(南より北に向って)

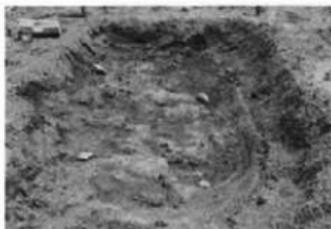


No. 2 C1T-1



No. 3 C1T-3 遺物出土状況

写真第17図 C地点とCトレンチ



No. 1 C1-7 遺物出土



No. 2 C1T-7 鉄滓出土

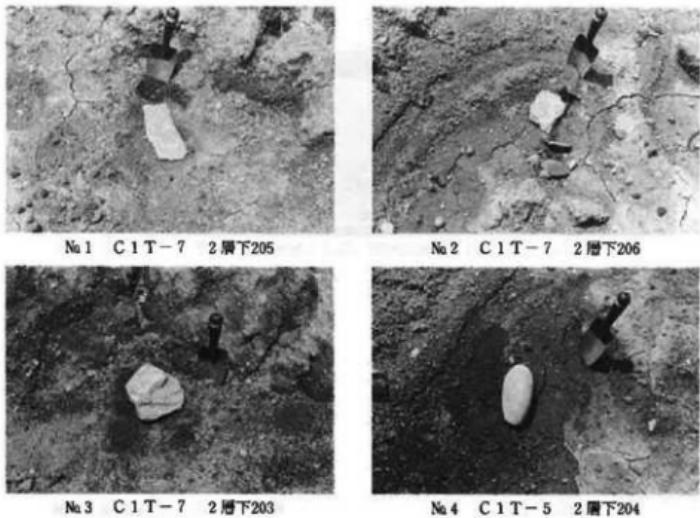


No. 3 C1T-7 遺物出土

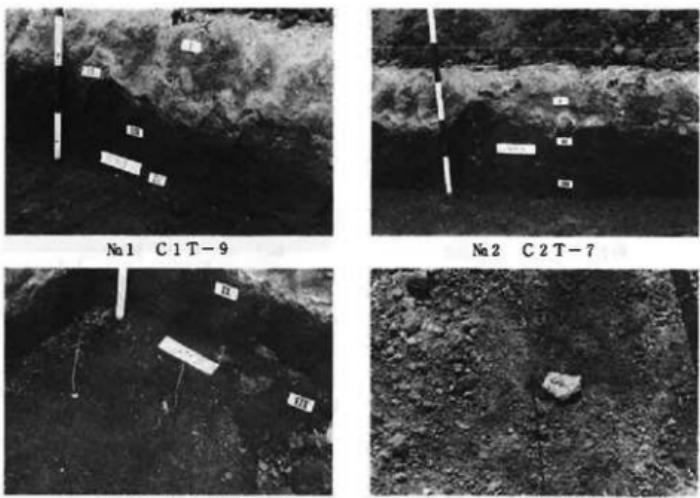


No. 4 C1T-7 断面

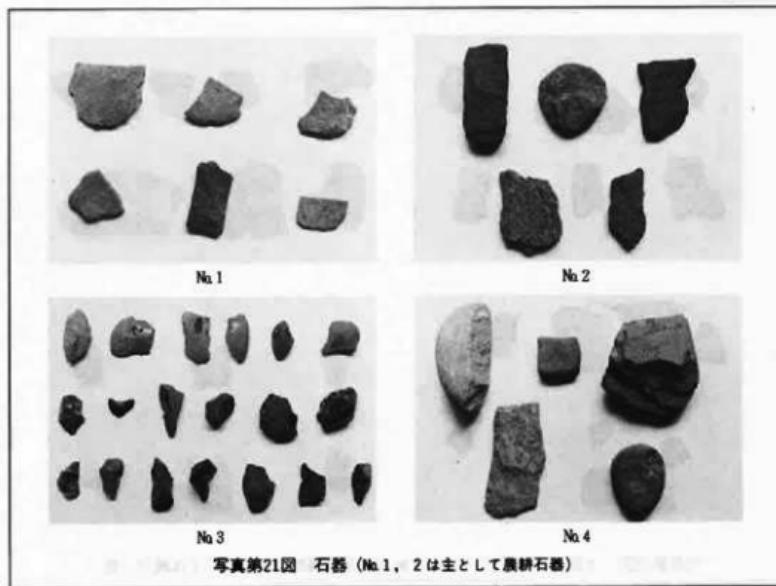
写真第18図 各トレンチと遺物出土



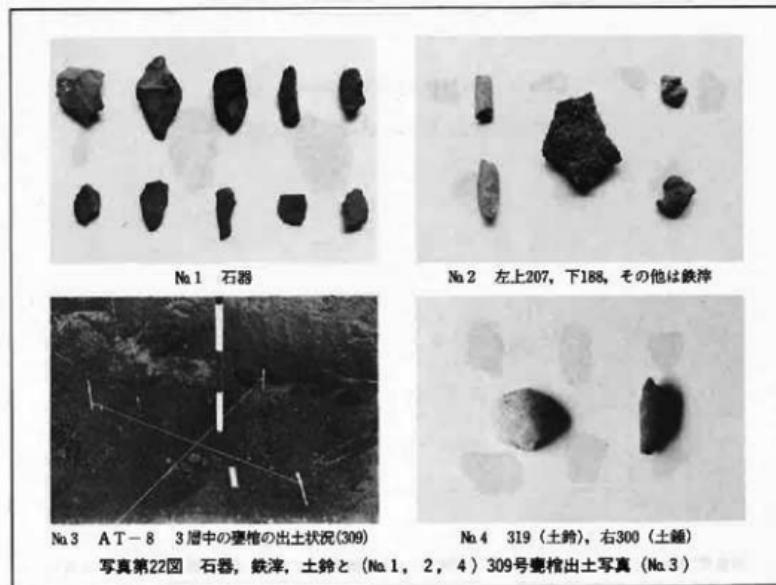
写真第19図 各トレンチの遺物出土状況



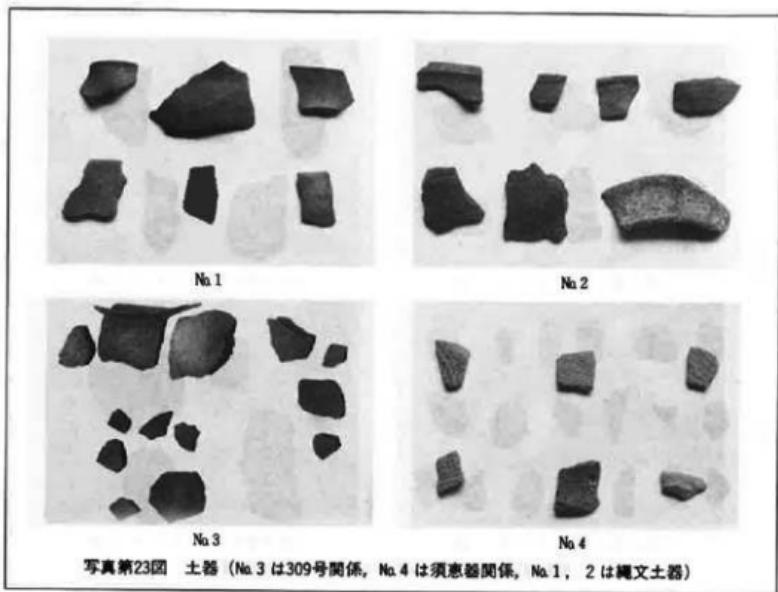
写真第20図 各地層と遺物の出土状況



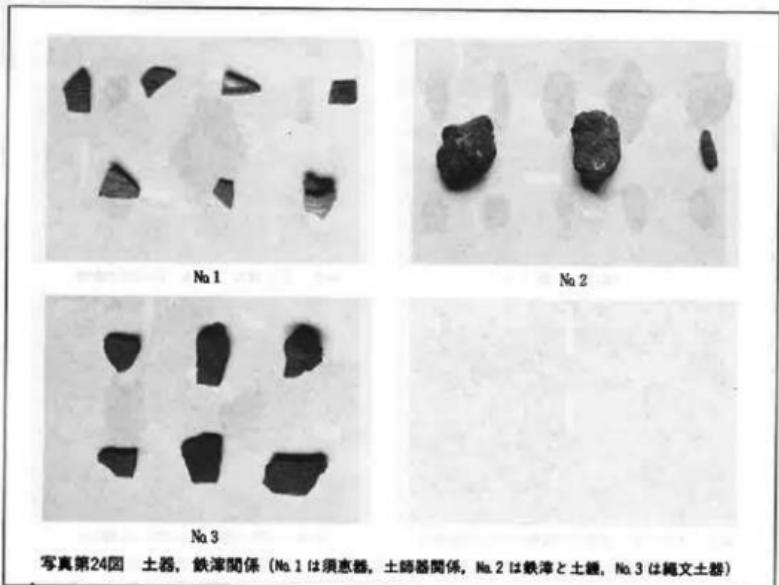
写真第21図 石器 (No. 1, 2は主として農耕石器)



写真第22図 石器, 鉄滓, 土鉢と (No. 1, 2, 4) 309号墓棺出土写真 (No. 3)



写真第23図 土器 (No. 3 は309号関係, No. 4 は須恵器関係, No. 1, 2 は純文土器)



写真第24図 土器, 鉄津関係 (No. 1 は須恵器, 土師器関係, No. 2 は鉄津と土器, No. 3 は純文土器)

有明町文化財調査報告書第1集

宅地造成に伴なう中田遺跡調査概報

昭和59年1月

発行所 有明町教育委員会  
長崎県南高来郡有明町大三寅戸1438の1

協力者 (株)尾崎製材所  
長崎県南高来郡有明町瀬江町

印刷所 印刷所(㈲)昭和堂印刷  
長崎県諫早市幸町622-4  
(日本図書コード 89200)

